

## 蔵前の保母養成所をたずねて

—埋もれていたもの—

### 土屋とく

#### 第三章 符合

これまでの作業は言わば川の中程の繁みに隠されているものを、そこから源流にさかのぼって再び下りながらあちこち目をこらして探しているようなものであった。

こうした方法で手を尽しても目的物が見つからないとすれば、残された手だては現在あるものを川口として辿り直し、埋もれた何かを掘り起すよりほかはあるまい。

#### 一 最後の手段

既述した養成所に関係の深そうな学校や幼稚園の系譜

(前号一覽表) から導かれる現在のものは、

都立台東商業高等学校と私立学校法人 蔵前幼稚園の

二つにしばられる。前者は浅草区教育会経営による浅草実科高等女学校が昭和二十年三月十日、東京大空襲の際炎上焼失した後、旧福井中学校に仮寓し昭和二十二年、学制改革を機に都立台東高等学校として昇格新発足。更に三十一年商業高等学校となったものである。

浅草実科高女の歴史には、空襲を受けた際勤労奉仕のためその日宿直していた女学生数十名が教師と共に全員焼死したという痛ましい一こまが秘められている。ま

た、その前身である浅草実科女学校は大正十二年の関東大震災の時も蔵前は被害が大きく、焼失ののち区画整理

のためわずかに位置を変えて再建されている。

このように震災―再建―空襲―移転―戦後の混乱―学制改革等の変動が、探している大正前期の養成所の存在から遙か隔てていくつか重なっている。都立高校としても、もう四十年近い歴史を刻んでいる台東商校である。

数々の事情を斟酌する時この学校に保母関係の記録が現在迄保存継承されているとはとても考えられない。

一方蔵前幼稚園は昔、浅草実科女学校の附属として経営母体を同じくする上に建物も近接し震災や戦災時に同時焼失。途中迄は運命を共にしている。幼稚園はその後しばらく休園となるが昭和二十四年区立柳北小学校の校舎の一部を借りて浅草幼稚園を開設、伝統を継いだ。

しかし柳北小学校は向柳原町と且ての園の所在地となり離れているため、蔵前附近の住民からは元の位置に対する希望が強く、現在地、台東区蔵前二ノ十一ノ十に蔵前幼稚園が同じ年に開設の運びとなる。

この辺の地理的環境は今では隅田川近く迄びっしりと住宅や会社の建物が立ち並んで以前とは様相が一変して

いるとはいえ、御徒町方面から進むと既橋の手前の道を右折ししばらく行った右側に園舎がある。これは「幻の蔵前の保母養成所」の位置に近似している。

この園をめぐる歴史的資料は同園々長である深見寅吉氏談としての記述が多く、したがってどこ迄古い記録が残されているか分からないながらも保育者養成について調べるなら幼稚園に直接当たるのが順当と思われた。

## 二 蔵前幼稚園へ

現在の園長は五月女正夫氏である。これ迄の事情と用件につき依頼の書状、次いで電話で面会を求め。

やがてその機会が与えられ、いろいろと話を伺うことが出来た。深見寅吉氏は前園長で既に故人となられ、五月女氏とは岳夫に当る方であった。

幼稚園や洋和裁の教育を、午前、午後、夜間の三部制をとって授業をした蔵前家政学院―同校併設―の事情に就いては伺えても、保育者養成に関する伝承や心当りは無いとの御返事であった。

明治初期からの変遷の歴史事情に関してはこちらからの資料の提供がむしろ多い程であった。ここでも新しい手がかりは殆ど無く、又往年浅草区保育会で活躍された方々は皆鬼籍に入ってしまった。

明治四十年代この地に柳北幼稚園及び柳北実科女学校を設立するのに力を尽し、代表者であった杉浦虎太郎氏は同地区で薬局を経営、長年区会議員や学務委員をつとめた有力者であったという。

杉浦薬局は現在も実存、血を引く人は蔵前幼稚園の卒園生の由。だが代が替っている今では大正前期の古い昔を知る人は無いであろうとのことであった。

養成所の有無についてはこれ以上の追究は無理であろう。資料のうち先方に必要なものだけを残すこととし、コピーする間の雑談の中で昔の人々の功績や教育に対する熱意を語るともなく交しているうち「これだけの活動をしてきた浅草教育会の諸記録は、いつ、どこに行ってしまったのだろう」という事に話題が転じた。教育会は戦争協力団体として敗戦後解散されるまで続いたもので

ある。そして蔵前幼稚園とは非常に密接な関係がありながら、この園に全く資料らしきものが残されていないのは何故なのか……。

戦災の惨禍があまりにも大きくすべてが灰燼に帰したのか、また敗戦処理のため何らかの力が働いたのか、或は時が流し去ったのか。いずれにしても区教育会という組織が個人的なものでなく、公立的性格をもっていたにしてはどこか不思議な感じがするのである。

折しも蔵前幼稚園は近々七十周年の記念事業を行う予定を組んでいるということで、当方の資料と共に浅草区教育会の業績を考慮するため五月女園長が古い記録の行方を探す意欲を示して下さる。

氏は長く東京都の教職に在り小学校長を退任された後園長となられ、教育界の諸事情に明るくまた力を持っている方であった。

この日一縷ののぞみを托して園を辞する。  
ここで又、しばらく時が過ぎていく。

### 三 意外な発見

ある日五月女園長よりお電話をいただく。それは浅草区教育会の諸記録が現存していることの知らせであった。

失われてしまったとばかり考えていた資料が思いがけず見つかったのである。しかも予想もしない、台東区立田原小学校の倉庫の片隅に置かれてあったという。

やがて、風雨の強い中を、氏に導かれて田原町の校舎に向う。

五月女氏の友人である同小学校長、木内守正氏の話によれば、この資料は何故かいくつかの学校を転々とした後、田原小学校に保管されてあったという。田原町地区はあの大空襲による焼失をまぬがれた下谷の一郭に当るが、たまたま改築を予定されている同校では諸物件整理の都合上、この資料をどこの帰属物として移動させるか考慮中だったとのことである。

大き目のダンボール箱二つに、明治時代から昭和に至る教育会の資料は年代を経て古び、また埃をかぶって長

い間眠っていたのである。この中に多田タメノ様が大正の初期に通ったという巖前の保母養成所の謎がかくされている筈なのである。

これは十中八九間違いの無いところである。だが何故、幼稚園教育百年史にも、東京教育史にも、公文書の届け出資料にも、区誌その他にも記録が無かったのである。

それと特定出来る対象が、どこにも見出せないのが、この調査の最大の謎であったのだ。

五月女氏、木内氏、土屋の三名で和紙と和綴の冊子に達筆で書かれた古い記録を繰っていく。明治末年から大正の十年代にわたっての調べが中心となる。

浅草区教育会の活動は細大洩らさず実に几張面に残してある。しっかりした組織と事務処理の確実さに驚く。

講習会、講演会、展覧会、学事諸記録、会計報告、教育会発行の雑誌、等々。

中に教育会経営の学校の講師陣の出勤簿があり、養成所に関係があったと思われる前述の巖谷小波、山田耕作

久留島武彦の名を探していくが、これらの名は見出せず「中山晋平」の文字と朱の邦形の跡……。

更に手分けをしながら保姆養成関連の記述に注目していくが——無い——

強いて考えれば教員・保姆対象の各種講演会や講習会が養成の役割を果し、それが多田様の言う養成所に重なるという事になるるか。

ほぼあきらめかけた時、土屋が再び手にして繰っていた大正八年の記録簿に綴じられていた「補助金増額の請願」教枚の文書の一部に目が吸いよせられた。

#### 四「補助金増額ノ請願」と経費の捻出

浅草区教育会ハ明治式拾参年ノ創立ニシテ茲ニ三十年ニ亘リ雑誌ノ発行ヨリ教員講習ヲ始トシ壮丁予備教育教育通俗講演等教育ニ関スル各般ノ事業ニ尽瘁シタル

補助金増額ノ請願

浅草区教育会ハ明治式拾参年ノ創立ニシテ茲ニ三十年ニ亘リ雑誌ノ発行ヨリ教員講習ヲ始トシ壮丁予備教育教育通俗講演等教育ニ関スル各般ノ事業ニ盡瘁シタルコト決シテ遺憾ナラズトシテ而シテ明治四十年度本区ヨリ年額八百円ノ補助金ヲ得ルニ至リタル以来各事業遂行上多大ノ便益ヲ得タルコトハ本区對シテ大感謝ナル所ナリ然レ時勢ノ起運ニ鑑ミ大正六年四月ヨリ附属第一女子実技学校及ヒ附属幼稚園ヲ創設シテ以來各事業遂行上多大ノ便益ヲ得タルコトハ本区對シテ大感謝ナル所ナリ然レ時勢ノ起運ニ鑑ミ大正六年四月ヨリ附属第一女子実技学校及ヒ附属幼稚園ヲ創設シテ以來各事業遂行上多大ノ便益ヲ得タルコトハ本区對シテ大感謝ナル所ナリ

コトハ決シテ僅少ナラストス

而シテ明治四十年度本区ヨリ年額八百円ノ補助金ヲ得ルニ至リタル以来各事業遂行上多大ノ便益ヲ得タルコトハ本区ニ對シテ大感謝スルトコロナリ

トハ本区ニ對シテ大感謝スルトコロナリ

然ルニ時勢ノ進運ニ鑑ミ大正六年四月ヨリ附属事業トシテ浅草家政女学校及ヒ附属幼稚園ヲ柳北女子実技学校ヨリ継承セリ

然ルニ繼承當時既に金參千五百円ノ負債ニ加フルニ校舎廢朽ヲ告ケ修理ノ止ムナキヲ以テ外囲ノ修築校舎ノ手入校具ノ講入等ノタメニ金貳十餘円ヲ要シ遊戯室ノ新築ニ金七百餘円合計約金參千餘円ノ經費ヲ要シタリ 更ニ大正七年三月ニ至リテ校舎狹隘ヲ告グルルヲ以テ金五千餘円ヲ投シテ教室及教員室小使室ノ改築ヲ為セリ 尚同年夏季休暇ヲ利用シテ幼稚舎ノ改造ニ加フルニ女学校用ノ教室及割烹教室等ノ新築ノタメ金六千餘円ノ支出ヲ見タリ

ココニ於テ本会ハ此多額ノ經費ヲ補ハンカ為区内篤志家ノ同情ニ訴ヘ応分ノ寄附ヲ仰クコトトセリ 而カモ今日未タ予定額ニ達セス且下負債ハ尚金壹万參千円ヲ算ス

今や校舎ハ他ノ女学校及幼稚園ニ比シ殆ト遜色ナキニ至レルモ尚校具器械等ノ設備不十分ニシテ将来此ノ方面ニ經費ヲ要スルコト誠ニ尠ナカラス 更ニ優良教員ノ増聘及現在教員ノ待遇上ニモ多大ノ經費ヲ支出セサルヘカラス

故ニ今春以來授業料ノ増徴ヲ決行シタルモコレ僅少ノ額ニシテ所期ノ支出ヲ弁スルニ足ラス 殊ニ昨夏以來諸物価ノ暴騰ハ益々經費ノ困難ヲ生スルニ至レリ

幸ニ大正七年九月ノ借入ニ属スル金六千円ノ負債利子ハ某幹事ノ厚意ニヨリテ支弁シ幾分軽減ノ道ヲ得タリト雖モ經常費中意外ノ失費多ク大正七年十二月迄支出シタル金額ハ実ニ五千五百八十三円四十三錢五厘ノ多キニ達セリ

以上ノ如ク經營上多大ノ困難ヲ極メタルヲ以テ大正八年一月ヨリ東京府教育會教員伝習所ノ夜学ニ校舎ノ一部ヲ貸与シ月額金六十円ノ収入ヲ得ルニ至リシモ尚支出ヲ償フニ足ラス 本年度末に於テハ約壹千餘円ノ不足ヲ生セントス

而シク現在ニ於ケル家政女学校及幼稚園ニ於ケル教育の価値ハ一般社会ニ認識セラレ生徒幼稚募集ルモノ著シク為ニ本年四月ニ於テ女学部七学級(參百名)幼稚部三組(百余名)ヲ編成シ 大正九年度ニ於テ女学部九学級(四百名)幼稚部三組(百二十名)ヲ編成

シ此ノ増員ヲ得ル授業料増額ハ区内有志一般ノ寄付ト  
ニヨリ数年ヲ期シテ負債元本ノ消却ト学校今後ノ計画  
トヲ全フセントス然レドモ同校ノ現狀斯クノ如キヲ以  
テ本会ヨリ同校ノ經費ニ幾分ノ補助ヲ与へ同校ノ経営  
ヲ易カラシメ以テ同校本来ノ目的ヲ遂ケ区内教育ノ為  
ニ尽サンメントス

更ニ本会ノ他ノ事業ヲ顧ミレバ現下尚施設ヲ試ミ度点  
少ナカラサルノミナラス将来大ニ經費スヘキ方面多々  
ナルモ現在ノ財力ニテハ如何トモスル能ハス  
一方ニ会員ノ増加ニヨリテ増収ヲ図リ居ルモ所期ノ財  
源ヲ得ル能ハス

希クハ此ノ際特別ノ御詮議ヲ以テ向フ五カ年ヲ期シ從  
来ノ補助金ト加ヘテ年額貳千円御補助相成此段奉懇願  
候也

大正八年 月 日

社団 浅草区教育会長 今井喜八  
法人

浅草区長 山崎林太郎殿

(原文のまま)

長い引用になつたが、浅草区教育会——二章参照——  
の人々が地域の教育振興に対して並々ならぬ熱意と努力  
を重ねながらも、理想として掲げるものと現実の厳しさ  
とは相反し、そのはざままで苦慮する姿が行間から読みと  
れる。

特に篤志家の寄付に頼り会員の零細な拠出金によつて  
成立つ経済的基盤は弱いものであつたといわねばなるま  
い。そしてこの文書は教育会の裏面的な歴史そのもので  
はないかと思う。綴られていた書類で区長への下書きか  
記録としての写しかはわからないが、私にとって重要な  
のは半ばにある数行

「如上ノ如ク経営上多大ノ困難……………大正八年ヨリ東京  
府教育会教員伝習所ノ夜学ニ校舎ノ一部ヲ貸与シ月額金  
六十円ノ収入ヲ得ルニ至リシモ尚……………」云々の箇所  
である。

四十二銭五厘ノ多ク違フ  
 以テ如ク経費上多ク困難ヲ極メタルヲ以テ止ム  
 一月ヲ東京府教育會教員伝習所ニ在リて  
 二部ノ賃金月額令云フ日ノ収入ヲ得ルコト向  
 支チテ償フ是ヨリ本年度末ニ於テ約壹千五百圓  
 ノ不足ヲ生ジテ、而シテ現在ニ於テル女子學校及幼稚  
 園ナル教育的價値ニ一般社會ニ認識セシメ  
 往幼児童爲活ハルニモ若シテ爲ニ本年四月ニ於テ女子  
 部七等級ニ至ラズニ幼稚部三組(百五元)ヲ編成シ  
 此止九年度ニ於テ女子部九等級(四百元)幼稚部  
 五組(百五元)ヲ編成シ此ノ増員ヲ得ル授業料増  
 額ニ区内有志一般ノ各財トシテ教員トシテ員俸

### 五 謎の氷解

この書類を発見し、この文字に遭遇することによつて、これまでの難問は一気に解決をみる。そして迷路のように入りこんでいたいくつかの疑問点は次々に氷解していった。

(一) 蔵前の保姆養成所は独立の機関ではなく保育者養成に当たっていたのは、東京府教育会の教員伝習所であ

る。

(二) 前に述べたが教育会の組織は半公的・半私的性格をもっており、従つて伝習所の授業料は無料か又は非常に安かつたと思われる。

(三) 場所については全く一致する。

(四) 府教育会と区教育会は上部―下部組織として両者は相補的役割を担っていたと考えられる。

しかし多田様が最初に示した条件(一章)と一致しない点、実情とのズレがはつきり説明しきれない問題がまだ残されている。

。入学条件と特例として認められた理由

。通学期間二年は伝習所としては長いこと

。校長 講師の当時の陣容

。伝習所の在所として記載が無かつたわけ、等だが特定出来たことだけは間違い無いと言つて良いであらう。

(つづく)

(貞静保育専門学校)